

〔科目名〕 教養特殊講義 II				〔単位数〕 2 単位		〔科目区分〕 教養科目 (第4群)	
〔担当者〕 大森 史博 Ohmori Fumihito			〔オフィス・アワー〕 時間: 講義開始時に指示する 場所: 613 研究室			〔授業の方法〕 講義	
〔科目の概要〕 <p>哲学の原義は「知を愛する」ということ、つまり事象についてのあくなき探求を意味する。そうであるならば、哲学とは、概念を形成する活動である以前に、ましてや、すでに出来上がった概念の操作や陳列である以前に、問いの生成に寄り添うことであり、その探究を表現にもたらそうとする努力であるはずだ。</p> <p>この講義が焦点にするのは、哲学や諸々の探究なかで提起されてきた概念や問いではあるが、同時にそうした思考のプロセスの表現である。例えば、定型詩や小説といった文学作品の文体はもとより、諸々の芸術作品のスタイル、あるいは学術研究において用いられる論述の作法さえも、各々の思考を牽引し、促しもすれば規制することにもなる媒介なのである。多様な表現のあり方が、思考を触発し、媒介するという、この点に目を向けたい。</p> <p>現代思想の論客たちが、さかんにロゴス中心主義を批判してきたことは記憶にあたらしい。しかし、それはどういふことだろうか。もっとも素朴には、伝統的な哲学の方法はロゴス(つまり言葉や理性)を用いることであり、哲学の営為とロゴスは切り離すことができない。人間の知の営みとロゴスを分かちことができると考えるのは、あまりに安直である。だが、ロゴスそのものの出自は、ロゴス以前の経験に求めなければならないはずである。</p> <p>本講義の目的は、こうした思考と表現の問題を軸として、哲学を学ぶための、あらたなアプローチの仕方を探ることである。より具体的に言えば、①伝統的なロゴスの技法である「対話」という方法を実践的に行うこと、②哲学、文芸、芸術、等々の多様な表現のスタイルに触れ、慣れ親しむこと、③哲学の問いを生み出し、思考を媒介する対象(自然のものであれ、芸術作品であれ)を捉え、その経験を言葉によって表現にもたらし、といった実践的な活動をおこなう。履修者は、各授業回の小レポートの記述、プレゼンテーション原稿の準備、提題者との対話や質疑応答、課題レポートの提出と総括、といった活動への参加と報告を必須とする。進め方については、授業開始時に説明する。</p>							
〔「授業科目群」・他の科目との関連付け〕・〔なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつくか〕 <p>春学期に開講の「哲学 I」は、西洋哲学の歴史を軸としたベーシックな講義であり、また、この講義と同じく秋学期に開講される「哲学 II」は、現代哲学のトピックともなる諸問題を軸として考察を深めようとする講義である。そこで本講義は、それらの授業と密接に関連しながらも、また別様の仕方で哲学への接近を試みることにより、哲学のあらたな魅力へと受講者を誘うこと、対話をとおして探究の思考をとにもすることを企図している。</p> <p>かつて現象学派の哲学者たちは、哲学を「事象そのものへ」の遡及であり、哲学するとは「世界を見ることを学びなおす」ことであると語っていた。いまいちど自らの思考において、世界を見る、世界について知るといふ探究の経験を捉えなおし、再考をすすめることにより、この世界を生きることのエートス(世界に住まうという人間性)と存在のロゴス(いまここに存在することの意味)について理解を深めたい。</p>							
〔科目の到達目標〕 <p>問われている哲学の「概念」、核心にある「問い」の意味を理解し、関連する文献を読み解き、解釈することができる。学び覚えた思想や概念をふまえ、「問い」を吟味し、仕上げ、提起することができる。探究的対話に積極的に参加し、人間とその生きる世界について理解を深めることができる。</p>							
〔ディプロマ・ポリシー (DP) との関係〕							
学部				学科			
DP1	DP2	DP3	DP4	DP1	DP2	DP3	
			○				
〔学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫〕 <p>アニメーション、映画、絵画、漫画、音楽、等々を素材として、それらの作品の核心となる思考を取り上げ、哲学のトピックとしたことは概ね好評であった。これまでの授業の組み立てを引き継ぎつつ、発表の方法、対話や議論の方法については、適正な人数で活発な相互交流が可能になるよう改善し、積極的な参加を促す。</p>							

〔教科書〕 使用しない。プリントを配布する。	
〔指定図書〕 なし	
〔参考書〕 『科学で大切なことは本と映画で学んだ』、渡辺政隆著、みすず書房、2021年 『対話の技法』、納富信留著、笠間書院、2020年 『メルロ=ポンティ『眼と精神』を読む』、メルロ=ポンティ著、富松保文訳、武蔵野美術大学出版局、2015年 『マンガは哲学する』、永井均著、岩波現代文庫、2013年 その他、授業のなかで紹介する。	
〔前提科目〕 関連する哲学の講義「哲学Ⅰ」、「哲学Ⅱ」を履修していることが望ましい。	
〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等) 各回の授業での小レポートの記述(18%)、プレゼンテーション原稿の準備(36%)、発表、対話、質疑応答、議論への参加(24%)、課題レポートの提出と総括(22%)、詳細は、授業のなかで説明する。	
〔教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望〕 自ら問いをもつこと、自ら考えることを本来として、焦らず、ねばり強く、授業に参加して欲しい。 授業スケジュールや各回の進捗、扱う内容は、参加者の関心や理解に応じて変更することがある。	
〔実務経歴〕 該当なし	
授業スケジュール	
第1回	テーマ(何を学ぶか): イントロダクション 内 容: 授業の趣旨と進め方、学習の課題と評価についての説明、ログスについて 教科書・指定図書
第2回	テーマ(何を学ぶか): 「哲学する」ということ① 内 容: 探究の技法、対話、言葉、メディア、表現として対話編(プラトン) 教科書・指定図書
第3回	テーマ(何を学ぶか): 「哲学する」ということ② 内 容: 探究の媒介としての言葉と映像表現 教科書・指定図書
第4回	テーマ(何を学ぶか): 探求の主題と方法① 内 容: プレゼンテーション原稿の準備と発表について、絵画における思考(セザンヌ) 教科書・指定図書
第5回	テーマ(何を学ぶか): 探求の主題と方法② 内 容: 探究の主題と方法、なぜ漫画なのか 教科書・指定図書

第6回	<p>テーマ(何を学ぶか):探求の主題と方法③</p> <p>内 容:フィクションが与えるリアリティ、夢と現実を分かつ指標(デカルト)</p> <p>教科書・指定図書</p>
第7回	<p>テーマ(何を学ぶか):探求の主題と方法④</p> <p>内 容:探究の主題と問いかけ、哲学へのあらたなアプローチ</p> <p>教科書・指定図書</p>
第8回	<p>テーマ(何を学ぶか):プレゼンテーションと対話①</p> <p>内 容:参加者による提題、および探究的対話</p> <p>教科書・指定図書</p>
第9回	<p>テーマ(何を学ぶか):プレゼンテーションと対話②</p> <p>内 容:参加者による提題、および探究的対話</p> <p>教科書・指定図書</p>
第10回	<p>テーマ(何を学ぶか):プレゼンテーションと対話③</p> <p>内 容:参加者による提題、および探究的対話</p> <p>教科書・指定図書</p>
第11回	<p>テーマ(何を学ぶか):プレゼンテーションと対話④</p> <p>内 容:参加者による提題、および探究的対話</p> <p>教科書・指定図書</p>
第12回	<p>テーマ(何を学ぶか):哲学と映像表現①</p> <p>内 容:問いと表現、人間の存在の身体性について</p> <p>教科書・指定図書</p>
第13回	<p>テーマ(何を学ぶか):哲学と映像表現②</p> <p>内 容:問いと表現、時間について、死について</p> <p>教科書・指定図書</p>
第14回	<p>テーマ(何を学ぶか):哲学と映像表現③</p> <p>内 容:語りえぬものと問いかけ、表現の放棄と語る声</p> <p>教科書・指定図書</p>
第15回	<p>テーマ(何を学ぶか):総括</p> <p>内 容:質疑応答</p> <p>教科書・指定図書</p>
試験	<p>期末レポート</p>